

## 延喜『公望私記』の構造

### —引用形式と表記を中心に—

鈴木 豊

キーワード：『日本紀私記』 『釈日本紀』 矢田部公望 矢田部名実 万葉仮名訓

**要 旨**：『公望私記』は延喜の日本紀講書に尚復として参加した矢田部公望が作成した『日本紀私記』であり、現在は逸文として『釈日本紀』等に伝わるのみである。延喜『公望私記』は矢田部名実の残した「元慶私記」に公望が自説を加えることによって成ったと推定されている。同様に「元慶私記」は承和講書の成果の上に成り立っていると考えられる。弘仁から康保にいたる講書は、前代の講書の成果を包摂しつつ、より適切な訓を制定していく場であった。講書の成果を集成しているといわれる『釈日本紀』や乾元本『日本書紀』所引『日本書紀』の万葉仮名訓・『和名抄』所引『公望私記』の比較・分析を通じ、延喜『公望私記』の構造と原表記を明らかにし、日本語史資料としての価値の大きさを明確にする。

#### [1]はじめに

[1.1]目的 『公望私記』は『釈日本紀』等に逸文としてのみ伝えられている。『公望私記』はそれ以前の『日本紀私記』を内包していると考えられることから、その構造と全体像を把握するためには困難が伴う。しかし師説を尊重するという日本紀講書の性格により、前代の説はよく保存されていることも事実である。『公望私記』もそれ以前の講書の記録（私記等）を忠実に留めていたと考えられ、事実そのことは現存する逸文『公望私記』を比較することで証明される。鈴木豊(2006)では『和名抄』に引用されてからの『公望私記』万葉仮名訓の表記の改変について考察したが、小論では『公望私記』の原姿を推定するとともに、『和名抄』に引用される以前の『公望私記』万葉仮名訓の表記についても考察する。特に乾元本『日本書紀』所引『日本紀私記』が承和講書時に定められた和訓（の一部）であり、その万葉仮名訓の字面は成立時の表記を継承しているということを明らかにしたい。

[1.2]方法 延喜『公望私記』を資料の一部として成ったと考えられる三つの資料（『釈日本紀』・乾元本『日本書紀』紀所引『日本紀私記』・『和名抄』所引『公

望私記』)の比較を通じて、『公望私記』の構造を明らかにする。父矢田部名実の作成した『元慶私記』をもとに、延喜講書に尚復として臨んだ公望が事前に作成しておいたのが『公望私記』であるとの仮説に基づき、考察を進める。それは現存『日本紀私記』(成書・逸文)の呈する著しく改変され複雑で錯綜した後代的状況の見通しを良くするための便宜の方法である。和訓がどの時代の講書によって成ったものか、和訓の成立時の表記がどのように継承されているのかあるいはいないのかについても検討する。養老から元慶にいたる4回の講書の成果である私記の和訓が、幾重にも層を成して私記に保存されていることを示すことにより、日本語史研究の資料価値をよりいっそう高めることができるものと考えられる。

## [2] 『公望私記』について

[2.1] 研究史 日本紀講書全般について論じたものに太田晶二郎(1939)・関晃(1942)があり、『日本紀私記』については北川和秀(2001)による研究史の整理、元慶私記について論じた石崎正雄(1962)・粕谷興紀(1972)、『延喜私記』について論じた石崎正雄(1963)、『和名抄』所引「田氏私記」について論じた西宮一民(1970)等の先行研究がある。小論のテーマに直接関わるものとして、『公望私記』の構造を論じたものに神野志隆光(2001)(2006)がある。鈴木豊(2006)は『和名抄』の和訓供給原たる『公望私記』の万葉仮名訓がどのようにして源順に選ばれ、『和名抄』の改編・転写によって表記が改変されていったかについて考察したものである。また、鈴木豊(2005)は講書における声点注記の起源について考察したものである。以下に先行研究で明らかにされていることを確認しておく。

[2.2] 作者 矢田部公望。生没年未詳。公望は延喜日本紀講書の尚復。承平日本紀講書の博士。元慶日本紀講書の尚復矢田部名実(?-900)の子と考えられる。

[2.3] 名称 『釈日本紀』に「公望私記」「延喜公望私記」、『和名抄』序に「田氏私記」がある。西宮一民(1970)では「公望私記」と「田氏私記」をべつのもので考えたが、後述するように同一のものであると考えられる。

[2.4] 成立 公望が延喜日本紀講書に臨むに際して事前に作成したと考えられている。延喜講書の成果をも含むと考える説もあるが、小論の基本的立場は延喜講書の成果を一切含まないと考えるものである。

[2.5] 伝本 逸文としてのみ伝わる。『釈日本紀』・『和名抄』・『日本書紀』古写本・『袖中抄』・『古今集序注』・『御鏡等事』等に引用されているものが現存する。

[2.6] 形式 見出し・和訓・問の文・答の文・(愚実案)・(公望案)の各要素から成る。矢田部名実が残した『元慶私記』に「公望案」として自説を書き加えた形

式であると推定されている。『和名抄』序によれば一部三巻。「和名希存」とあるのは源順が『和名抄』編纂資料として必要とした漢語名詞に対応する和語名詞が、『公望私記』の規模から見ると、多く含まれていないという意味であると考えられる。『釈日本紀』は「公望案」を「公望私記」に改変して引用する。

[2.7]表記 原『公望私記』の和訓は万葉仮名表記であると考えられる。承和講書で定められた和訓の表記(仮名の字面までも)を受け継いだと考えられる。『釈日本紀』では和訓は省略されたり片仮名化されたりしており、成立時の姿を留めていない。

[2.8]影響 『和名抄』・『釈日本紀』・『古語拾遺』裏書や後世の和歌注釈書等にも引用される。天慶日本紀竟宴和歌の序(作者は大内記橘直幹)における講博士矢田部公望に対する非常に高い評価や公望詠歌の配列が最後尾であることなどにより、当時『公望私記』の権威は絶大であったと考えられる。『和名抄』の主たる資料の一つとなったことも必然性があったのである。乾元本神代紀所引『日本紀私記』の万葉仮名訓も少なくともその一部は『公望私記』からの抄出と考えられる。

[2.9]構造 『釈日本紀』に引用されている「公望私記」「私記」については以下に記すように、古くより重要な指摘があり、次第に『公望私記』の構造が解き明かされてきている。まず、坂本太郎(1938)は『釈日本紀』の「私記」に元慶私記が多く含まれることを指摘した。続いて、太田晶二郎(1939:p.67)は「思ふに、公望私記は元慶の問答を録した既成の私記に後から公望が案を書き加えた二段構成のものではなからうか。「延喜公望私記」と冠してもあるものは、延喜の講書に尚復として列する為の準備として前回の問答に検討を加へたのもであらう」とし、さらに同p.68では『釈日本紀』に単に「私記」として引用される項目も、「又最初から「私記」と記したのでも袖中抄には「公望注」として引いてあるものに合ふものが有る所から見ると、実は公望私記から取つてあながたゞ私記としてある元慶の問答が多分なのであらうと思はれる」と推定した。

『公望私記』が『元慶私記』からなるという太田説を受けて、関晃(1942)は「公望が延喜講書と承平講書との間の或る時期に於て、従来存する数種の私記を取捨し批判を加へて「公望私記」なる名称の書を遍述し」と批判した。これに対して神野志隆光(2001)は関の根拠とした例を丹念に検討した上で「関の太田説批判は決定性に欠け、反証たりえないといわねばならぬ」とした。

元慶私記について詳細に検討を行った石崎正雄(1963)はその内容を以下の三点に要約している。

(1)元慶私記には、講筵時の講記と、講筵後の矢田部名実によって補訂された

或は疑点を正して官に提出した)私記と二種類あつたことが、記事の上だけでなく、内容的にも確認できる。

おそらく前者は、問答体で、後者は必ずしも問答体をとっていない。

(2)兼方の頃、すでに元慶私記は単独で存在しなかつたようである。単独書から引用したように見えるが、実は兼方がある私記から抄出して、その上に「私記曰」と記して他と区別したと思われる。

その大部分は、延喜公望私記の中に含まれていたらしい。併しその原形は完全ではないが保管されていた。即ち前記の如き諸形式を示して、従来いはれているよりはるかに多数のものが指摘出来る。

(3)その内容について言えば、従来の私記より一步をすすめて、本文批判を行い、内外の典籍と対照し、或は前後の文によってその誤りを正している。

また、上記(2)の注として石崎正雄(1963 : p.27)は「卜部兼方の積日本紀中の説が、ほとんど兼文のそれであるために、兼文の講説が単独書として残存しなかつたように、矢田部名実の私記は、同じ矢田部公望の私記の中に完全に包含されていたので、名実私記の単独存在の意義は失われて早くから亡失したものであろう」とする。

西宮一民(1970)は『和名抄』所引「田氏私記」をその形態から「和訓集の体裁を持つもの」であり、「田氏私記」と「公望私記」を別物と考えたが、源順は『和名抄』編纂に当たって『公望私記』から漢語名詞に対応する和訓部分だけを抄出したと考えるほうがより矛盾が少ないように思われる。

神野志隆光(2006)は『積日本紀』に引く「公望私記」「私記」の記事と兼方本・兼夏本『日本書紀』、『袖中抄』、『古今集序注』に引用されている「公望私記」の記事とを比較したとき、『積日本紀』の「私記」と他資料の「公望私記」対応することにより、「こうした状況から、『積日本紀』のなかの「私記」は「公望私記」として顕在させるものをはるかにこえて、「公望私記」(元慶私記)を中心として構成されるものであったというのがあたつていよう」と結論づけた。

『公望私記』の研究史の大略を記したが、これまでの研究で『積日本紀』中の単に「私記」として引用されている膨大な記事のほとんどが『公望私記』からの引用であること、『公望私記』が『元慶私記』に公望説を加えることによって成り立っていること、それと同時に公望説を加えないものも『公望私記』に数多く含まれていることなどのことが明らかにされてきた。これにより『積日本紀』の引く『日本紀私記』が素性の分からない「私記」からの切り貼りによる単なる集成ではなく、原形を留める資料の集積、つまり養老以降の講書の姿を層をなして引用しているという見通しが立ったと考えられる。

[3]『公望私記』の構造

[3.1]『釈日本紀』所引「公望私記」 [2.9] で見たように、『釈日本紀』の記事の大半を占め、『釈日本紀』の基盤をなす資料である「私記」の実態は、延喜『公望私記』に包含された『元慶私記』である。延喜『公望私記』にならっていえば元慶『名実私記』である(元慶の日本紀講書に基づいて矢田部名実が作成した『日本紀私記』という意味の名称)。

以下に延喜『公望私記』とそこに内包される元慶『名実私記』の実態を、いくつかの例によって具体的に検証してみよう。引用は『新訂増補国史大系』による。説明の都合上引用文中に下線を付し、【引用】ごとに(1)(2)…のように算用数字で通し番号を付した。

フ、メリ キサシヲ  
【引用1】含<sub>レ</sub>牙 (釈日本紀 p.219)

(1)私記曰。問。此云<sub>二</sub>溟洋而含<sub>レ</sub>牙<sub>一</sub>也。即此春秋緯文也。説<sub>二</sub>彼文<sub>一</sub>者皆云。牙者万物萌芽之義也。然則此云<sub>レ</sub>牙者遍通<sub>二</sub>万物之牙<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>独葦牙<sub>一</sub>。只キサシヲフ、メリ止可読歟。答。旧説又有<sub>二</sub>キサシ<sub>一</sub>之説。但案<sub>二</sub>仮名本<sub>一</sub>。全云<sub>レ</sub>含<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>。故存<sub>二</sub>其文<sub>一</sub>猶読<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>也。即是天地初文之後。化為<sub>二</sub>国常立尊<sub>一</sub>者也。然則是不<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>万物之牙<sub>一</sub>也。猶宜<sub>レ</sub>読<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>。又問。凡製<sub>レ</sub>書之例。若有<sub>二</sub>同時兩処<sub>一</sub>者。具<sub>レ</sub>前略<sub>レ</sub>後也。今此前云<sub>レ</sub>含<sub>レ</sub>牙。後云<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>。若善後同者宜<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>含<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>。而今略<sub>レ</sub>前具<sub>レ</sub>後。可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>乖<sub>一</sub>尋常製文之例也。然則是不<sub>二</sub>同物<sub>一</sub>甚明。如何。答。先師相伝之説也。今論<sub>二</sub>物意<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>問。於<sub>二</sub>輒改読<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>忍也。又旧説有<sub>レ</sub>読<sub>二</sub>キサシ<sub>一</sub>。而先師棄而不<sub>レ</sub>同。今又所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>取也。

(2)公望私記云。(3)師説又非也。何則仮名本全云<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>。此書若同<sub>二</sub>彼書<sub>一</sub>者宜<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>也。而今此棄<sub>レ</sub>葦而只云<sub>レ</sub>牙。至<sub>二</sub>於下文<sub>一</sub>乃云<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>。明知含与<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>不<sub>二</sub>相同<sub>一</sub>也。而猶執<sub>二</sub>旧説<sub>一</sub>不<sub>二</sub>改読<sub>一</sub>之。公望意所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>取也。宜<sub>レ</sub>拠<sub>二</sub>(4)問者<sub>一</sub>之説<sub>一</sub>歟。

【引用2】陽神陰神 (釈日本紀 p.223)

(1)私記曰。問。陰陽之訓読以<sub>レ</sub>何可為<sub>二</sub>正説<sub>一</sub>哉。答。師説。読<sub>二</sub>陰陽<sub>一</sub>為<sub>二</sub>雌雄<sub>一</sub>。  
(2)安氏説。陽神読<sub>二</sub>ヒコ神<sub>一</sub>。陰神読<sub>二</sub>ヒメ神<sub>一</sub>。下皆効<sub>レ</sub>之。又  
(3)公望私記云。案養老等説如<sub>二</sub>師説<sub>一</sub>也。(4)安氏説出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>誰口<sub>一</sub>哉。

ミツハカリ  
【引用3】水 泉 (釈日本紀 p.198)

私記曰。(1)藤進土案云。水泉乎水量止読。其義難=会釈-。如何。(2)師説。  
 (3)先儒説。雖<sub>レ</sub>咄猶為<sub>レ</sub>難乎。(4)善兄(5)多郎又稱<sub>レ</sub>難=会釈-。  
 (6)愚実案云。泉當為<sub>レ</sub>泉。々。水平也。見=周礼并文選景福殿賦-。但以為泉与<sub>レ</sub>  
 泉。字相似。因為=此誤-歟。(7)大師驚稱。蓋(8)藤侍郎并(9)進士同<sub>レ</sub>之。其後  
 (10)萱(11)滋兩内史聞=愚実之案-。共感。(12)右尚書後聞又許<sub>レ</sub>之。  
 泉。説文曰。射準的也。臣鑑曰。射之高下準的也。魚滅反。

【引用1】は公望が元慶『名実私記』中の「師説」を批判したものである。下線部(1)は『新日本紀』の編者卜部兼方が新たに加えたものである。また下線部(2)は本来「公望案」とあったものを兼方が改変したものである。記事中の下線部(3)「師説」、(4)「問者」は元慶講書における「師説」であり、「問者」である。よってこの場合の師説は元慶日本紀講書の博士善淵愛成説であって、延喜講書の博士藤原春海ではない。公望は元慶私記に参加していないので「問者」が誰であるかを記さない。延喜講書において博士藤原春海は元慶師説を踏襲し、そのためにおそらく公望はそれに反対する説を出したと思われる。中川ゆかり(2003)によれば春海の竟宴和歌はその間の事情を示している。

【引用2】の下線部(1)(3)は【引用1】と同じく兼方の改変である。下線部(3)(4)「安氏」は小林芳規(1969)によれば「安氏は、漢籍にも「先堂安野師説」「安学士説」、また、「安良(岑)両家私記家」と引かれる。これは安野文継(勇山文継と同人)と考えられ、紀伝博士(弘仁二年)である。日本書紀の安氏もその内容から見て同人に比定される」とする。安野文継(773-826)は嵯峨天皇の侍読、弘仁初年紀伝博士、大学助を任じ、晩年には東宮学士等に就いた。弘仁七年には『史記』の進講を終え、従五位下に昇叙した。弘仁講書以来約30年間隔で行われた日本紀講書は、「日本紀学」とも云べき学問を形成し、日本紀学を継承する家も生まれたが、公望は弘仁講書で多くの説を出して活躍した「安氏」が誰かを知らなかったということになる。多・滋野・島田・菅野等の姓が承和以前の講書に見えるのに対し、その名を見ない矢田部氏は承和までの講書に関係することがなかったのかもしれない。名実の説が『新日本紀』の「十四・十五即ち書紀廿一乃至廿三の部分に多く偏在するやうに見うけ」られ「書紀の歴史記録的部分の通達者」(大田晶二郎(1939))であるのも、家に日本紀学の蓄積がなかったためとも考えられるのである。

【引用3】の下線(1)～(10)はすべて元慶日本紀講書の関係者である。唐名によって記された人物が誰であるのかを以下に記す。人物の同定作業については石崎正雄(1963)、北川和秀(2001)によるところが多くある。

- (1) 藤進士…藤原春海。文章生。尚復の一人。
- (2) 師…善淵愛成。元慶講書の博士。大学助教。
- (3) 先儒…承和講書の博士菅野高平および春澄善繩・滋野貞主を指すか。
- (4) 善兄…善淵高文。明経得業生。尚復の一人。
- (5) 多郎…多広珍。文章生。元慶講書の尚復の一人。他の記事中では「多生郎」と記されている。弘仁講書の博士多人長の子孫か。
- (6) 愚実…矢田部名実。元慶講書尚復の一人。この私記の筆録者。公望は子と考えられる。
- (7) 大師…善淵愛成か。
- (8) 藤侍郎…藤原保則。民部大輔。
- (9) (藤)進士…(1)と同じ。
- (10) 菅(内史)…菅野惟肖。大内記。
- (11) 滋(内史)…滋野良幹。
- (12) 右尚書…藤原山蔭。右大弁。

【引用3】により「私記」が元慶講書で尚復を務めた矢田部名実の手による者であることが知られる。講書および竟宴の参加資格については延喜講書について考証した工藤重矩(1979)が参考になる。

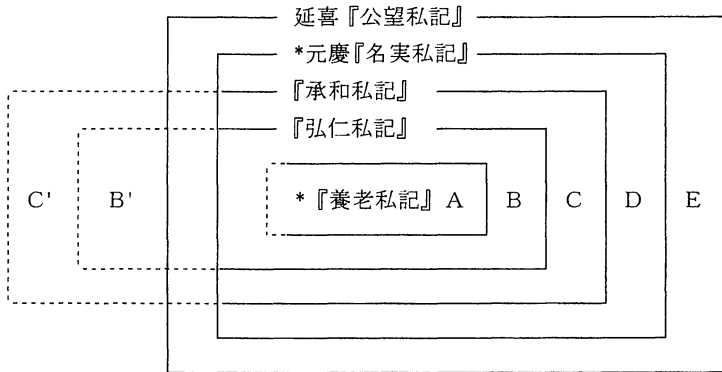
以上【引用1】【引用2】により『釈日本紀』における「私記」と「公望私記」の引用形態を示した。元慶『名実私記』の実態を示す【引用3】から元慶の講書が活発に行われ、当時の日本紀研究が堅実かつ高度な内容をもつ実りの多いものであったことの一端を示すことができたと考える。

[3.2]延喜『公望私記』の構造 『釈日本紀』に引かれる「私記」の大部分が延喜『公望私記』であり、その基盤をなすのは元慶『名実私記』であるとするこれまでの研究成果をさらに一歩進めて、養老から承和までの日本紀講書の成果が『名実私記』にどのように取り込まれているかを考えてみよう。養老から承和までは訓を定めることが講書の中心であったと推定されている。その訓は通常の漢文訓読と異なり、『日本書紀』成立以前の「倭語」の復元であり、また復元を目指すものである。よって養老以降の師説は尊重され、前代の「定訓」が改められた場合でも、それらの訓は「旧説」「後説」として保存されることが多く、一度講書の中で認められた訓は容易に廃棄されることはなかった。養老の訓はそのほとんどが弘仁の講書でも引き継がれた(定訓として講書の関係者により承認された)と考えられる。定訓が改められた場合のみ前代の訓は「養老」の注記を付して後世に伝えられたのである。承和講書でも事情は同じであったと考える。承和の講

書で定訓と認定された弘仁の訓は承和私記に無注記のまま包摂され、定訓とならなかった弘仁の訓のみ「弘仁」の注記を付されて後に伝えられることになったと考えられる。このようにして養老・弘仁の訓は承和の定訓の中に埋没し、大部分は無注記のまま引き継がれていったと考えられる。

以上を踏まえて、養老講書から延喜『公望私記』までの私記の基本構造を示したのが〈図1〉である。これは講書の継続性・保守性を考慮し、私記が公的に承認された各時代の「日本紀研究」の最高到達点であるという認識に基づいた図である。E『公望私記』はA～Dを内包することを表している。以下にA～Eの資料的性格について簡略に説明し、さらにいくつかの補足を加えることにする。

〈図1〉『公望私記』の構造



- A:『養老私記』……………項目数不明。「養老」の注記をもつ和訓が存在し、それらに上代特殊仮名遣いの違例が見られないことなどから養老の訓が伝えられたと考える(鈴木豊(1988b)等を参照)。
- B:『弘仁私記』……………甲本に相当。約900項目を収載する。『養老私記』の項目をすべて含むか。多人長作成の私記に、承和講書を前にして嶋田清田が弘仁講書の記憶を頼りに序を作成し、私記本文に加えたと推定する(鈴木豊(2005)参照)。
- B':『弘仁私記』の項目のうち元慶『名実私記』にとられなかったもの。
- C:『承和私記』……………項目数不明。『弘仁私記』の項目をすべて含むか。『和名抄』所引『公望私記』の和訓はすべてこの範囲に含まれる。乾元本紀所引『日



本紀私記』万葉仮名訓もこの範囲に含まれるか(石崎正雄 1971)、西宮一民(1977)参照)。

- C': 『承和私記』の項目のうち元慶『名実私記』にとられなかったもの。  
 D: 元慶『名実私記』……『承和私記』の見出し項目(承和講書までの和訓)の一部(その割合は不明)に矢田部名実が注を施したもの。『釈日本紀』所引「私記」(『袖中抄』所引『公望私記』・『古今序注』所引『公望私記』)はすべてこの範囲に含まれる。  
 E: 延喜『公望私記』……元慶『名実私記』に矢田部公望が加筆したもの。『釈日本紀』所引「公望私記」の記事がこれに相当する。『和名抄』所引『公望私記』は『公望私記』に含まれる『承和私記』見出しの和訓部分から源順が「倭名」にふさわしい語を抄出したものである。

承和講書までの私記(A・B・Cで示される)は見出し項目(書紀本文)に和訓を示し、必要に応じて簡単な注を付すという形式であったと考えられる。それは「養老私記」と『弘仁私記』(『日本紀私記』甲本)の形式から推定される。おそらく「養老私記」は『楊氏漢語抄』のごとき形式だっただろう。承和講書以降ある時期に『承和私記』とは別に承和講書までの和訓を注記した『日本書紀』が作られたかもしれない。元慶講書の「仮名本」等がそれに相当する可能性もある。書紀傍訓が承和私記に由来するからこそ、和訓を類聚し、片仮名訓を万葉仮名に変更して成ったものが『日本紀私記』(乙本・丙本)と呼ばれることになったのだろう。片仮名から万葉仮名への変更は西宮一民(1970)に具体例が示されている。

問答の後に自説を加える様式には、すでに律令問答私記があり、問答の後に自説を書き加える形式の元慶『名実私記』はその影響を受けているかもしれない。元慶度講書の博士が大学助教(後に明経博士)の善淵愛成であることも関係しているかもしれない。

『和名抄』所引「田氏私記」はE『公望私記』からの抄出であるが、実際には見出し項目に付されていた和訓(図1)のEとCが重なる範囲=承和私記の和訓の一部)のみを抄出したものであると考えられる。『釈日本紀』はEの範囲から項目の記事を省略することなく抄出したと考えられる。ただし万葉仮名表記の和訓は片仮名に改め、さらに傍訓化している。和訓がまったく省略されている場合もある。

[3.3]関係資料における項目数 延喜『公望私記』を引用する資料が、『公望私記』を何項目引用しているのか、それぞれの資料で項目が一致するのは何項目であるのかについて検討する。

I『和名抄』所引「田氏私記」…118項目

II『釈日本紀』所引「私記」…約430項目(太田晶二郎(1970):索引による)

III『釈日本紀』所引「公望私記」…31項目(西宮一民(1970):p.299)

IV乾元本紀所引『日本紀私記』…205項目

IVの205項目のうち46項目が『釈日本紀』の述義に、12項目が秘訓にも立項されている。1項目は重複して立項されているので、乾元本紀所引私記と『釈日本紀』の見出し項目が一致するのは全57項目である。IとIIでは重なる項目がないことから西宮一民(1970)は『田氏私記』を『公望私記』とは異なる私記で和訓集のごときものと推定したが、『公望私記』は〈図1〉のような構造をもっており、IIは『公望私記』そのものではなく「公望案」(『釈日本紀』では「公望私記」と改変されている)を記事中に含む項目なのである。IとIVでは13項目が重なる。

#### [4]乾元本『日本書紀』所引『日本紀私記』

[4.1]万葉仮名訓一覧 天理図書館蔵ト部兼夏写乾元本『日本書紀』神代卷上下に注記されている万葉仮名表記の和訓は大野晋(1965)・大野晋(1967)・小林芳規(1969)・小林芳規(1972)・鈴木豊(1988)等で高く評価され、石崎正雄(1971)では承和の訓と推定されたものである。鈴木豊(1986)では全例を索引の形で示したが、『日本紀私記』研究のためには全例を表出順に示すことが必要と判断し、以下に万葉仮名訓全205例を示すこととした。1983年7月に原本の閲覧によって万葉仮名訓の朱墨・声点の位置・擦り消し例の確認等を行った。なお、既発表の拙稿で一例として扱ってきた49・50、101・102、171・172を説明の都合上小論では分割し扱い、また二例として扱ってきた94を統合したので、万葉仮名訓の総数は202例から205例に変更されている。以下に乾元本紀所引『日本紀私記』万葉仮名訓全例を示す。各用例は次の要領で示す。

通し番号／万葉仮名訓／[紀本文]／巻・行・(左右上下)／(声点)／朱墨・声点の形態などの注記：無注記は朱圈点

1. 須美阿岐良加奈留 [清陽] — 5 上 (平上平平上平上平)
2. 久々毛利豆 [溟滓] — 4 (平平上平上)
3. 支左志乎不々女利 [含牙] — 4 (上上上上平上平上)
4. 多奈比支 [薄靡] — 5 上 (上上上平)
5. 都々為豆 [淹滞] — 5 (平平平上)
6. 久波志久陀弊奈留 [精妙] — 5 (平平上平上上平上) 線点

7. 阿布支也須久 [搏易] — 5 〈平平平上平〉線点 ※「搏」は木篇
8. 加礼 [故] — 6 上 〈平平〉線点
9. 阿女都知比良久留波志女尔 [開關之初] — 7 〈平上平平平平上上上上上〉線点
10. 化為此云奈留下皆放此 [化為] — 10 上 〈平上〉線点
11. 師說嶋讀子麻自此下諸嶋并洲字皆同讀也云々 [嶋] — 66 (声点ナシ)
12. 師說也比路呂止乃乎 [八尋乃殿] — 95 〈上上上平上〉声点墨・線点
13. 左波奈利 [多] — 164 下 〈平平上平〉
14. 正勝 家本麻娑柯菟 江本麻娑河 一云麻左柯豆 [正勝] — 336 上 〈平上平上〉(○○○) 〈平上平上〉線点
15. 也麻都知 [山雷] — 356 〈平平平上〉線点
16. 乃都知 [野雷] — 357 〈平平上〉線点
17. 柯曾能美古止 [父] — 435 上 〈平平平上上上〉線点
18. 久麻乃久須毗命 [熊野櫛樟日] — 455 〈平平平平平平○〉線点
19. 食乎須 卜父同之 [食] — 473 〈上上〉線点
20. 太須介 麻都利天 [奉助] — 486 〈平平上 上上平上〉仮名朱
21. 伊都加礼与 [祭也] — 487 〈平平平上平〉仮名朱
22. 云云 之加之加伊布 私記如此一部之内皆同意 [云尔] — 516 上 〈平平平平上平〉
23. 古止阿介之豆 [稱之] — 527 〈平平平平上平〉仮名朱・声点墨
24. 阿知支奈之 [无状] — 542 〈平平平平平〉
25. 之伎麻岐 [重播種子] — 544 〈上上上上〉
26. 阿波奈知須 [毀其畔] — 545 〈平平上平平〉
27. 布知許麻 布都許麻或説 [斑駒] — 545 下 〈上上上平〉〈上上上平〉
28. 尔波奈比支古之女須止伎 [當新嘗時] — 546 〈上平平平上上平上上平〉
29. 加毗 [梭] — 549 (声点ナシ)
30. 久尔乃宇知 [六合之内] — 551 〈上上上上平〉
31. 止古也美 [常關] — 551 〈上上上上〉
32. 左万 [方] — 553 〈上上〉
33. 太波加利 [慮] — 554 〈上上上平〉
34. 止古与 [常世] — 554 〈上上上〉
35. 阿万乃加古也万 [天香山] — 557 〈平平平上上上上〉
36. 加牟都江尔波 [上枝] — 558 〈平平平平平上〉
37. 止利都介 [懸] — 558 (声点ナシ)
38. 奈加都江尔波 [中枝] — 558 〈平平平平上上〉

39. 止利加介 [懸] — 559 〈平上平上〉
40. 止利之弓々 [懸] — 〈平上平平上〉
41. 知麻岐乃保古 [茅纏乃稍] — 561 〈上上上上平平〉
42. 巧作俳優 太久美和左平支須 或説巧不讀 [巧作俳優] — 562 上 〈平平平上上上上平〉
43. 保止古呂也岐 [火處燒] — 564 〈平平上上上平〉
44. 宇介布世布美止々呂可之 或説宇介布世 [覆槽置] — 565 下 〈平平平上上上上上上平〉 〈平平上上〉
45. 嗒樂如此 加久恵良久也 [嗒樂如此] — 568 上 〈上上上上上〇〉
46. 之梨久女奈波比支和多須 [界以端出乃繩] — 571 下 〈平平平平上上上上上上平〉
47. 波布岐 [羽鞆] — 591 〈上上平〉
48. 比乃万倍 [日前] — 592 〈上平平平〉
49. 阿世奈波乎 波倍 [界以絡繩] — 596 裏 〈平平平平上 平上〉
50. 阿世奈波比岐和多須 [界以絡繩] — 596 裏 〈平平平平上〇上上平〉
51. 美々古曾利豆 [舉體] — 602 〈上上上上上平上〉
52. 也久左美多万不 [不平] — 602 〈上上上平平平上〉
53. 伎都止比奴 [来聚集] — 608 〈去平平上平〉
54. 加武保佐枳保佐枳々 [神祝々之] — 609 〈平平平平上平平上平〉
55. 伊都岐万都留 [崇秘] — 611 〈平平上上上上〉
56. 須礼留 [所作] — 637 〈平上平〉
57. 由布 [木綿] — 637 〈上上〉
58. 太々倍古乎倍 [称辞] — 638 〈平平上平平上平〉
59. 乃美万宇左之无 [祈啓] — 638 〈上平平平平上平〉
60. 多請 左波尔万宇須 [多請] — 639 上 〈平平上平平上〉
61. …古者謂衆多為左波又於保之義同耳 [多請] — 640 上 〈平平〉 〈平平平〉
62. 乃良之无 [宣之焉] — 646 〈上上上平〉 線点
63. 太乃毛之介奈之 [无頼] — 648 〈平平平平平平平〉
64. 与加良須 或説 [无頼] — 648 〈去平上平〉
65. 也良比也利支 [遂降去] — 650 〈上上上上上平〉
66. 波良倍於保須 [解除] — 657 〈平平平平平上〉
67. 阿女乎止与毛之 [扇天] — 660 〈平上上平平上平〉
68. 左岐久万之万世 [可平安] — 685 〈上上平平上平平〉
69. 利 私記 [布斗能理斗 〈平平上上〇〉] — 689 (声点ナシ・「理」の右側に注記)

70. 覓 万支 止无或説 [覓] — 694 上〈上平〉〈平上〉
71. 於无奈止 [老婆] — 694 (声点ナシ)
72. 阿之奈都知 [脚摩乳〈上平平〉] — 697 〈上上平平平〉
73. 久之伊奈太比咩 [奇稻太姬] — 699 〈平平平平平上上〉
74. 師説也万太鳥呂知 安氏説大蛇羽々ト讀也 [八岐大蛇] — 700 上〈上上上平平平〉〈上上〉
75. 也氏保乎利乃左介乎加美 [醸八醞酒] — 715 (声点ナシ)
76. 左須岐也万鳥由布 [作假廢八間] — 715 上〈上上上上上上上平〉
77. 都太々々支留 [寸斬] — 721 〈平上上上上平〉
78. 須加々々之 [清・之] — 727 〈平平平平平〉
79. 久美止尔 [奇御戸] — 738 〈平平平上〉
80. 於古之豆 [為起] — 738 〈平上上上〉
81. 宇无太々古止尔 [每生] — 748 〈上上上上平平上〉
82. 倍々毛加奈良須 師説是先師殊讀如耳 [必] — 752 上〈上上平上上上上平〉
83. 加之古之 [可畏] — 754 〈平平平平平〉
84. 波布利 [祝部] — 759 〈上上上上〉
85. 阿良万沙 [龜正] — 760 〈上上上上上〉
86. 比太須 [長養] — 762 〈上上上平〉
87. 女左无止之豆 [欲幸] — 766 〈平平上平平平〉
88. 加良左比乃 [韓鋤] — 771 〈平平上上上上〉
89. 私記 韓鋤之鋤 似鋤故名之 今案須支也 — 772 上 (声点ナシ)
90. 私記云 吉備神部許 支比乃加无止毛乃鳥乃止古呂 [吉備神部許] — 776 上  
〈平平平平平平上平平上上上〉
91. 古止阿介 [興言] — 781 〈平平平上上〉
92. 波々支利 私記 [蠅斫] — 784 〈上上上上上〉
93. 私記 粉 須支乃支 [杵] — 799 上〈上上上上平〉
94. 毛豆布沙无 曾奈倍 [将卧之具] — 801 〈平平平平〇 平平平〉
95. 波布无之乃 [昆虫] — 814 〈平上上上上上〉
96. 万之奈比也无留 [禁獸] — 814 〈上上上上上上上上〉
97. 於保无太加良 私記 [百姓] — 815 〈平平上上上上上〉
98. 美多万乃布由 私記 [恩頼] — 815 〈上上上上上上平〉
99. 阿良比多利 [荒芒] — 824 〈上上平平上上〉
100. 阿之加留 私記 [強暴] — 824 〈上上上上平〉「私記」朱
101. 万ツ呂波奴 [不和順] — 825 〈上上上上上上〉

102. 私記 不和順 万ツ呂波奴 一 825 上〈上上上上上〉
103. 左支美太万〔幸魂〕一 830 右〈上上上上上〉
104. 久支美太万〔奇魂〕一 830 左〈平平上上上〉
105. 私記 唯然唯音越之加奈利〔唯然〕一 830 上〈平平上平〉
106. 多々羅〔踏鞴〕一 837 〈平平平〉
107. 須女良美古止乃支佐支 私記〔天皇之后〕一 838 〈上上上上上上上上上平〉
108. 美鳥之世无止須 私記〔且當飲食〕一 840 〈上上上上上平平〉
109. 比止ツ乃鳥久奈 私記〔一箇小男〕一 842 〈平平平平上上平〉
110. 加々美乃加波 私記〔白藪皮〕一 842 〈上上平平平平〉
111. 伊止ツ良久之弓〔最悪〕一 847 〈上上上上上上上〉
112. 私記無自字只如此也 指間 多間与利〔指間〕一 847 上〈平平上平〉
113. 美於也〔皇祖〕二 6 〈上上上〉
114. 女久之止於保須御心乎於支弓〔鍾憐愛〕二 6 〈平平平平平平上○○上上上上〉  
 仮名朱・声点墨
115. 須女美麻〔皇孫〕二 7 〈上上上上〉
116. 保多留比乃加々也久神〔螢火光神〕二 9 〈平平平上去上上上上上○〉
117. 左波倍奈須〔蠅聲〕二 9 〈上平平上平〉
118. 阿之支毛乃 私記説〔邪神〕二 9 〈平平平平平〉(擦り消し)
119. 万女〔忠誠〕二 23 〈上上〉 仮名朱・声点墨
120. 宇ツ之〔顯〕二 24 〈平平平〉
121. 此云加豆邏…〔杜木〕二 29 上〈上上上〉
122. …加之杜字都無加津良之訓也〔杜木〕二 32 上〈上上上〉
123. 太加无奈左加〔胸上〕二 37 〈上上上上上平平〉「奈左加」の声点線点
124. 尔波奈比〔新嘗〕二 38 〈上平平平〉
125. 波也知〔疾風〕二 42 〈平平平〉
126. 毛加利〔殯〕二 43 〈上上上〉
127. 支左利毛知〔持傾頭〕二 43 〈上上上上上〉
128. 和太ツ久利〔造綿者〕二 45 上〈平平平上平〉
129. 任讀与左須〔任事〕二 46 左〈上上上〉線点
130. 於良比〔啼哭〕二 46 〈上平平〉
131. 於毛保豆利〔作色〕二 53 〈平平平上平〉
132. 止毛加支〔朋友〕二 53 〈上上上上平〉
133. 波介之〔慷慨〕二 67 〈平平平〉
134. 安万乃波止〔天鵲船〕二 76 左〈平平平上上〉線点

135. 阿女美万 [天孫] 二 87 〈平上上上〉
136. 隈讀久褒泥 [隈] 二 89 〈上上上〉線点・仮名朱・声点墨 ※「褒」は「磨」の誤り
137. 斯圖梨 [倭文] 二 92 右 〈平平平〉線点 ※「圖」は構えナシ
138. 於志和介 私記説 [排] 二 96 上 〈上平平上〉線点
139. 曾 [襲〈平〉] 二 97 〈平〉
140. 儼介 私説 [峯] 二 97 〈平上〉線点・仮名・「私記」朱
141. 毗陀烏加良 [自頓丘] 二 100 〈平平平上上〉
142. 宇ツ无呂 [無戸室] 二 112 〈上上上上〉線点・仮名朱
143. 宇介比弓 [誓] 二 112 〈平平上上〉仮名朱・声点墨
144. 保乃須素利 [火關降] 二 115 〈平平上上上〉仮名朱・声点墨
145. 加美阿加利万之奴 [崩] 二 119 〈平平平上平平上上〉仮名朱・声点墨
146. 埃 [可愛] 二 120 〈平〉仮名朱・声点墨
147. 美左々支 [山陵] 二 120 〈上上上上〉
148. 知波也布留 [殘賊強暴] 二 123 〈上上上上上〉仮名朱・声点墨
149. 太加无奈左加 [高胸] 二 141 〈平平上上平〉
150. 比止之久 [恰然] 二 147 〈平平上平〉※拾見せ消ちで恰
151. 比奈布利 [夷曲] 二 167 〈上上上上〉仮名朱・声点墨
152. 於世利弓 [臨睨] 二 171 〈平平上上〉仮名朱・声点墨
153. 左也介利 [未平] 二 172 〈平平上平〉仮名朱・声点墨
154. 止於ツ於也 [上祖] 二 187 〈上上上平〉仮名朱・声点墨・「於」ママ
155. 於之太礼 [抑] 二 201 〈上平平上〉仮名朱・声点墨
156. 阿左和良比弓 [咲噓] 二 201 〈上上上上平上〉仮名朱・声点墨
157. 阿良波尔乃己等 [顯露乃事] 二 237 〈平平上上上平〉仮名朱・声点墨
158. 多久奈波 [梓繩] 二 239 〈上上平平〉仮名朱・声点墨
159. 多久奈波 弘仁記説 [梓繩] 二 239 下 〈上上上上〉仮名朱・声点墨・「弘仁記説」墨
160. 乃利 私 [制] 二 240 〈上平〉線点
161. 比止兄 [首渠] 二 253 〈上上〇〉仮名朱・声点墨
162. 弓於支保於比 弘仁説 [手置帆負神] 二 260 〈平上平上上平〉仮名朱・声点墨  
・「弘仁説」墨
163. 阿女万比等都 [天目一箇] 二 261 〈平平平平上平〉仮名朱・声点墨
164. 久之阿可留多万 [櫛明玉] 二 262 〈平平上上上平〉線点
165. 与和可比那弘 弘仁記説 [弱肩] 二 263 上 〈平平上上〇〉「弘仁記説」墨

166. 弥弓之呂 弘仁説 [代御手] 二 263 〈上上上上〉 仮名朱・声点墨・「弘仁説」墨
167. 布刀麻尔乃宇良基等 弘仁記説 [太占之卜事] 二 266 〈平平上上平平上平平〉 仮名・「弘仁記説」朱・声点墨
168. 比毛呂支 私 [神籬] 二 267 〈上上上上〉 仮名「私」朱・声点墨
169. 保支弓伊波久 弘仁 [祝之曰] 二 273 〈平上上上上上〉 線点・「弘仁」朱
170. 多加阿乃波良 弘仁 [高天原] 二 276 〈平平平平上平〉 線点・「弘仁」朱
171. 由尔波乃 [齋庭] 二 276 〈平平平平〉 仮名朱・声点墨
172. 由尔波 弘仁説 [齋庭] 二 276 下 〈○上○〉 線点・「弘仁説」墨
173. 伊奈乃保 [穂] 二 277 〈平平平平〉 仮名朱・声点墨
174. 私記云加曾 [親] 二 281 上 〈平上〉 線点
175. 加保与之 [有國] 二 288 〈上上平平〉 擦り消し・仮名朱・声点墨
176. 加保与之 [有國色] 二 298 〈上上平平〉 仮名朱・声点墨
177. 古乃花乃安万末比尔 [如木花] 二 302 〈平平○平平上平上〉
178. 阿乎比江 [竹刀] 二 322 〈平平平平〉
179. 多无左介 [甜酒] 二 326 〈上上平平〉
180. 波之由美 [梶弓] 二 334 〈上上上上〉
181. 加布都知乃ツ留支 [頭槌劔] 二 335 〈上上上上上平平平〉
182. 保倍乃毛古呂尔 [若標火] 二 385 上 〈平平平上上上上〉
183. 粟田 阿波不 [粟田] 二 391 上 〈平平上〉
184. 豆田 万女布 已上私記説 [豆田] 二 391 上 〈平平平〉
185. 支之乃比太ツ加比 [雉頓使] 二 392 〈上上上平平上平上〉
186. 曾保里乃耶麻 [添山峯] 二 399 〈上上上上平平〉 線点
187. 伊弓万須 [遊行] 二 400 〈平上上上〉 仮名朱・声点墨
188. 左支陀豆屨 [秀起] 二 405 〈上平平平上〉
189. 多々万毛由良尔 [手玉玲瓏] 二 406 〈平平平平平平上〉
190. 伊知之留之 [驗] 二 412 〈平平平平平〉
191. 于美佐知 弘仁記説 [海幸] 二 440 〈平平平平〉 線点・「弘仁記説」墨
192. 佐知 [幸] 二 440 〈上平〉
193. 佐知我閨世牟 [易幸] 二 442 〈上上上上上上〉 線点
194. 佐知 [利] 二 443 〈上平〉 線点
195. 万奈之加太万 [無目籠] 二 452 〈平平平上上平〉
196. 太加々支比女加支 [雉躰] 二 455 〈平平平上上上上平上〉
197. 与呂保比 [徒倚] 二 458 〈上上上平〉



198. 万利 [鏡] 二 459 (上平)
199. 安留状 [情之委曲] 二 463 (平上〇)
200. 於毛布留 [従容] 二 471 (平上平平)
201. 之保非乃太麻 弘仁記 [潮潤瓊] 二 477 (平平平平平平)「弘仁記」墨
202. 万久波之 [妙美] 二 529 (平平平平)
203. 和尔 [大鰐] 二 548 (平平)
204. 毛古与布 [透蚘] 二 555 (上上上上)
205. 美知 [海驢] 二 624 (上平)

[4.2]分析 118.と 175.は擦り消されており、複製本では見ることができないが原本で確認した。173.は本来 176.の場所へ記入すべき所を本文が「有國」を有するために誤って記入したもの。118.が擦り消された理由は不明。

上記万葉仮名訓の大部分は、A万葉仮名訓・B「弘仁記説」等の注記・C声点の三つの要素から成り立っている。Aには墨書と朱書がある。Bには「弘仁記説」の他に「弘仁記」「弘仁説」「弘仁」「私記説」「私記」「私記云」「私説」「私」があり、それらの中にはまれに朱書されるものもある。Cはその形態に圈点と線点があり、また朱点と墨点とがある。万葉仮名訓は兼夏によって「私記」から抄出されたものだが、これら朱墨・形態の別、注記の有無はその資料的性格を明らかにするための手懸かりとなるだろう。よって以下にやや詳しく分析してみよう。

まずA万葉仮名訓が朱書きされている例をその番号によって示すと、20.21.23.114.119.136.140.142.143.144.145.146.148.151.152.153.154.155.156.157.158.159.161.162.163.166.171.173.175.176.187.の31例となる。これ以外の174例は墨書である。

次にBの注記部分についてみると、「弘仁記説」とあるものが159.165.167.191の4例、「弘仁記」とあるものが201.の1例、「弘仁説」とあるものが162.166.172.の3例、「弘仁」とあるものが169.170.の2例、「私記説」とあるものが118.138.184.の3例、「私記」とあるものが22.69.89.92.93.97.98.100.102.105.107.108.109.110.112.の15例、「私記云」とあるものが90.174.の2例、「私説」とあるものが140.の1例、「私」とあるものが160.168.の2例である。「弘仁記説」～「弘仁」の注記を持つ例が全10例(このうち167.169.170は注記が朱書)、「私記説」～「私」の注記を持ち例が全20例(このうち100.140.168.は注記が朱書)、注記を重複して持つ例はないので注記のある例は全30例となる。なお、この他に「師説」を含む例として11.12.74.82.がある。

Cの声点については朱圈点が大部分を占めるが、その他に墨声点を注記するも

のに 12.23.114.119.136.143.144.145.146.148.151.152.153.154.155.156.157.158.159.161.162.163.166.167.168.171.173.175.176.187 の 30 例がある。12.以外はすべて圏点であり、かつ朱書の訓に付された例である。このうち 159.167 は「弘仁記説」、162.166. は「弘仁説」の注記をもつ。線点を注記するものに 6.7.8.9.10.12.14.15.16.17.18.19. 62.123.129.134.136.137.138.140.142.160.164.169.170.172.174.186.191.193.194. の 31 例がある。12.が墨点であるのを除くとすべて朱点である。このうち 191.は「弘仁記説」、172.は「弘仁説」、169.170.は「弘仁」、138.は「私記説」の注記をもつ。

A・B・Cを通じてもっとも一般的なのはA墨書・B無注記・C朱圏点のパターンである。Aが朱書きの場合はCの声点が墨圏点が注記されるのが一般的である。Bの注記に関しては墨書が一般的である。これとは逆に特殊なパターンと成っている例として、Bの注記に関わる例に 167.「弘仁記」が朱書、169.・170.「弘仁」朱書で朱線点、140.「私記」朱書で朱線点があり、Cの声点に関わる例として 123.声点が圏点と線点の両用、136.仮名・「私記」ともに朱書で声点は墨線点、140.仮名朱書で線点がある。

以上の分析を通じて最も注目すべきは、先行研究でも指摘されているように、朱書の和訓全 31 例中 28 例が、「弘仁」等の注記を持つ例 13 例全例が巻二に存在するということである(通しNo.の 1.~ 111.が巻一、112.~ 205.が巻二の例である)。逆に「私記」の注記がある 16 例はすべて巻一中の例である(「私記云」は巻一・巻二各 1 例、「私説」は巻二 1 例、「私」は巻二 2 例)。

石崎正雄(1972)は乾元本日本書紀の書写の経過について「まず兼夏の書写の奥書によれば、本文を書写した後、加点し、次いで校合を行っている。そして翌年私記と校合し更に神名の抄出を加えている。これをこの書についてみると、まず①本文の書写、次に②左右のカナ訓及び一部の万葉カナ訓を加え、同時に頭注・脚注・裏書の一部も記している。本文の異字の注記は、墨色・筆勢から見て①②両度のもので弁別できる。次に③朱でヲコト点をうち、この際も①②で誤脱したものを朱で追記している。ついで④校合を行っているが、善後の字と墨色・筆勢・書体の異なるものがそれである。これは文中に家本・イ本・或本・安本・江本などと注記しているものではない。そして翌年⑤神名抄出を行い、これを頭記し更に⑥私記と校合している。頭注・裏書の墨色・筆勢の異なったものをそれにあてることができる。以上のものはこの複製本で大体区別できるが、原本に当たっても判断の仕方では相違が出て来て、今後解決すべきものであろう。特に④と⑥の区別や、万葉カナ訓が②の段階ですでに記されたものか、③か⑥か、更に朱書のもものが特別のものかは、墨色だけでは区別できない問題を含んでいる」とされる。

巻一にある兼夏の奥書には乾元二年(1303)「乾元二年大簇廿七日以累家之秘本

書写了…」に続いて「嘉元二年古洗一日於閑窓之雨中加抄出訖／兼夏／見合私記等合點／了」とある。巻二奥書には「乾元二年閏四月廿一日以累家之本書写訖」に続いて「嘉元二年林鐘十日合私記了」とあり、巻一・巻二ともに嘉元二年(1304)に「私記」と見合わせていることが知られる。

朱書きの訓は上代特殊仮名遣いの正用や濁音仮名の使用など、時代的により古く成立した訓を多く含むようであるが、墨書の訓との違いが何に拠るのかをこれ以上明確にすることは困難である。現時点では兼夏は『公望私記』のごとき「私記」から主として見出し項目に付された万葉仮名書きの和訓を抄出し、書紀本文に傍訓・頭注として書き加えたと推定するに留まる。万葉仮名訓に朱書・墨書があること、「弘仁」等の注記が「弘仁記説」「弘仁記」「弘仁説」「弘仁」と一定しないこと、声点に圏点と線点があることなどから、兼夏は確固たる方針の下に万葉仮名訓の抄出に及んだのではなく、そのために抄出は幾度にも及んだと考えるべきだろう。

## [5]日本語史資料としての『日本紀私記』万葉仮名訓

[5.1]日本語学的検討 乾元本紀所引私記の中、特に朱書の訓の中に上代特殊仮名遣いを正用する例があることは大野晋(1965)(1967)により指摘され、その結果それまで疑問視されていた『養老私記』の存在がおおむね承認されることとなった。鈴木豊(1988)で指摘したように、濁音仮名の使用・有韻尾字の用法や使用字母の他資料との比較等からも、万葉仮名訓は表記を含めて平安初期のものであることを窺わせる。

[5.2]ヤ行のエ ここではア行とヤ行のエの区別について詳しく見てみよう。ア行とヤ行のエの区別の消失過程は、後述するように多くの問題点を孕んでいるようである。さて、乾元本紀所引私記の205例の和訓の中にア行のエの仮名はない。ヤ行のエの仮名を用いているのは以下の3例である。

36. 加牟都江尔波 [上枝] — 558 (平平平平平上)

38. 奈加都江尔波 [中枝] — 558 (平平平平上上)

178. 阿乎比江 [竹刀] 二 322 (平平平平)

枝を「江」で表記するのは正用であるが、竹刀のエについては上代に例がなく、正用か誤用かを決定できない。ここで問題になるのは竹刀の訓が『和名抄』にも引かれており、それが京本・前田本・伊勢十卷本(以上十卷本)、伊勢二十卷本・元和古活字版(以上二十卷本)のすべてにおいて「阿乎比衣」と表記されていることである。馬淵和夫(1971)は『和名抄』和訓の「衣」と「江」の分布を調査し、

「語頭には「衣」を用い、語中には「江」を用いるという傾向が歴然としており、それを破るものは先行文献であったようである」とした。語中に「衣」を用いる5語(「江」を用いるものは24語)のうち2語については二十巻本で「江」を用いているが、『和名抄』におけるア行・ヤ行のエの使い分けの例外として扱われている。鈴木豊(2006)において私は万葉仮名訓の原表記が『和名抄』に引用される時および改編や転写の過程でどのように改変されたのかを推定した。その結果源順は一部の仮名を除いては原資料の表記を改変することはなかったが、その後の改遍・転写の過程で字母は様々なレベルで改変されたという結論に達した。源順が『和名抄』の作成の資料として用いた『公望私記』はこれまでの考察のように『承和私記』の和訓の字面を継承するものであったと考えられ、その表記は「阿乎比江」であったと考えられる。『和名抄』の「阿乎比衣」が、いつ改変されたのかは不明であるが、その手懸かりとなりそうなのが東京大学国語研究室蔵天文本『和名抄』の「阿乎比江」表記である。宮澤俊雅(1987)によれば、下総本の和訓の真仮名の独自字種(字母)は、他の『和名抄』諸本に比べて多い数ではないという。ただし、字種の異同は「イロハ四十七字を基準とした区別(つまり正しい仮名遣い)を逸脱しないのが普通であるが、下総本では前部で四〇例ほどこの種の異例(比→伊、破→和、乎→於、保→於等)が見られる」とのことであり、「竹刀」の和訓の場合も、必ずしも『公望私記』の原表記を残しているということではなく、下総本側の改変(衣→江)である可能性もある。しかし小倉肇(2001)の「日本紀私記云阿乎比衣(竹刀)」は、『日本紀私記』乙本(神代下)では「阿乎比江」とあり、楊守敬校刊本『和名類聚抄』も同じ。これが原形であるとすれば、語中の「江」の例になる」や大矢透(1907)の「後世アラヒユトモイヘバ夜行ナルベシ」の指摘からも、『和名抄』成立時の形は「阿乎比江」であった可能性は高いと考えられる。小倉は『倭名類聚抄』『土佐日記』『本草和名』ではア行の[e]は語頭に、ヤ行の[je]は語中に分布しており、平安時代中期には語頭に[e]、非語頭に[je]という語音排列則があったとすることを明らかにしたが、上記『和名抄』の「竹刀」の訓が本来は「阿乎比江」であったらうという推定は小倉説を指示する。平安初期まで区別があった/e/と/je/が混同され、[e]と[je]が語頭と語中で相補分布をなすにいたる過程は、慎重な資料批判のうえになされなければならないといえよう。改編、転写を重ねてきた『和名抄』の万葉仮名訓の表記には成立時の表記との異同が大きい。音韻史の資料に『和名抄』を用いる場合、成立時の表記を残している『本草和名』や、承和私記の表記を推定しうる『日本紀私記』の和訓を参照すべきことが必須であろう。

[6]おわりに

『釈日本紀』所引「私記」・『和名抄』所引「田氏私記」・乾元本『日本書紀』所引「私記」万葉仮名訓の分析から、延喜『公望私記』とその母体である元慶『名実私記』は見出し項目に対応する和訓として承和講書時に定められた和訓を継承していたと推定した。延喜『公望私記』は『和名抄』序の「田氏私記一部三巻古語多載和名希存」という記述と、『釈日本紀』の本来の「公望案」を「公望私記」に改変して引用する形式とにより、本来の姿が不明確となり、その規模において過小評価されてきたといえる。しかし小論で考察したように、「田氏私記」は延喜『公望私記』であり、「一部三巻」は元慶までの講書の成果に延喜私記に臨む公望の研究成果を加えた大部の著作であったということになる。

仮名やヲコト点のない時代に始まった『日本書紀』の訓読は、朝廷を舞台とした講書という学問形態をもって定期的にかつ継続的に行われた。書紀の訓読は後世の漢籍訓読とは異なり、漢文で記された書紀の資料となった帝記・旧辞等に記されていた「倭語」を復元する作業であった。養老の講書は書紀の述作に関わった人々によってなされたはずである。「倭語」の実際を知り、朝鮮語にもヨミを付けることができた養老講書の成果は、後世の書紀講書関係者に大切にされたはずである。よって訓は改訂されることもあったが師説は尊重され、旧説として保存された。承和までの講書の目的は訓を定めることにあったが、元慶以降は承和の成果をもとに、それを検証したり合理的な説明を加えたりすることが可能となった。元慶『名実私記』がそれを生き生きと伝えている。『名実私記』を基盤として成った延喜『公望私記』は、見出し項目に承和講書で定められた和訓をそのままの表記で留めていたと考えられる。乾元本紀所引の万葉仮名訓の存在がそのことを強く支持している。全文の訓読という一つの目的が達成された後、それまで私記の中に留められていた書紀の訓は、万葉仮名表記割り注形式から片仮名表記傍訓形式へと姿を変えて傍訓へとその姿を変え、現存前田本のような形態になったと考えられる。講書では訓を読むことが重要なので、声点も漏れなく移点されたと考えられる。書紀に付されている片仮名の和訓とそこに注記されている声点が後世的な改変をほとんど蒙っていないのは、講書を通じて伝えられてきた『日本書紀』訓読の一貫性と保守性にあると考えられる。全文の訓読と片仮名表記の傍訓化が完成してほどなく講書が終焉を迎えたことも、結果として古訓が保存されることにつながったのである。

参考文献

- 石崎正雄(1962)「釈日本紀に引く日本書紀私記(二)―書紀古写本の傍註私記―」、『日本文化』41: pp.14-92, 天理大学おやさと研究所
- 石崎正雄(1963)「元慶私記考―釈日本紀に引く日本書紀私記(三)―」、『日本文化』41: pp.1-27, 天理大学おやさと研究所
- 石崎正雄(1972)「解説 日本書紀 乾元本」, 天理図書館善本叢書と書之部第一巻『古代史籍集』: pp.3-10, 八木書店
- 太田晶二郎(1939)「上代に於ける日本書紀講究」, 史学会編『本邦史学史論叢』上巻: pp.367-422, 富山房 ※『太田晶二郎著作集』第三冊: pp.59-90 (1992 吉川弘文館)に再録
- 太田晶二郎(1975)「前田育徳会蔵釋日本紀 解説 附引書索引」, 『釋日本紀』, 吉川弘文館 ※『太田晶二郎著作集 第五冊』: pp.1-93(1993 吉川弘文館)に再録
- 大野 晋(1965)「日本書紀の訓読について―日本書紀私記の仮名遣の検討―」, 『国学院大学日本文化研究所紀要』17: pp.11-22, 国学院大学日本文化研究所
- 大野 晋(1967)「訓読」, 岩波古典文学大系『日本書紀 上』解説: pp.34-52, 岩波書店
- 大矢 透(1907)「古言衣延弁補考」, 『音声の研究』5, 音声学協会
- 小倉 肇(2001)「衣」と「江」の合流過程―一語音排列則の変化を通して―」, 『国語学』52-1: pp.1-15, 国語学会
- 粕谷興紀(1972)「元慶の日本書紀私記と原本玉篇」, 『皇学館大学紀要』10: pp.59-80, 皇学館大学
- 金澤英之(1998)「石清水八幡宮『御鏡等事 第三』所引日本紀私記について」, 『上代文学』80: pp.58-68, 上代文学会
- 北川和秀(2001)「日本書紀私記」, 『国史大系書目解題 下巻』: pp.183-213, 吉川弘文館
- 工藤重矩(1979)「延喜六年日本紀竟宴和歌の歌人たち」, 『国語と国文学』56-4, pp.18-33, 東京大学国語国文学会
- 神野志隆光(2001)「『公望私記』をめぐって」, 『上代文学』87: pp.72-85, 上代文学会
- 神野志隆光(2006)「『日本紀私記』のために―『釈日本紀』と『公望私記』をめぐって―」, 『万葉集研究』28: pp.203-244, 塙書房
- 小林芳規(1969)「日本書紀古訓と漢籍の古訓読―漢文訓読史よりの一考察―」, 『佐伯博士古稀記念国語学論集』: pp.37-68, 表現社
- 小林芳規(1972)「日本書紀古訓私見」, 『天理図書館善本叢書月報5』: pp.2-4 (『古代史籍集』 天理図書館善本叢書と書之部第一巻付録), 八木書店
- 坂本太郎(1938)『大化改新の研究』, 至文堂 ※『坂本太郎著作集 第6巻』(1988, 吉川弘文館)に再録
- 鈴木 豊(1986)『古語拾遺 声点付語彙索引 乾元本日本書紀所引日本紀私記 声点付語

彙索引』(アクセント史資料索引第4号), アクセント史資料研究会

鈴木 豊(1987)「乾元本紀所引『日本紀私記』の声点について」、『国語学研究与資料』11  
: pp.13-24, 国語学研究与資料の会

鈴木 豊(1988a)「乾元本紀所引『日本紀私記』の万葉仮名について」、『国文学研究』96  
: pp.57-71, 早稲田大学国文学会

鈴木 豊(1988b)『『日本書紀』古写本中の万葉仮名表記の和訓一『日本紀私記』逸文に  
ついて一』、『国書逸文研究』21 : pp.11-20, 国書逸文研究会

鈴木 豊(2005)『『弘仁私記』序の「以丹点明軽重一『日本書紀』声点の源流を求めて一」,  
『論集Ⅰ』: pp.167-189, アクセント史資料研究会

鈴木 豊(2006)『『和名抄』所引『公望私記』の万葉仮名訓について』、『論集Ⅱ』: pp.1-37,  
アクセント史資料研究会

関 晃(1942)「上代に於ける日本書紀講読の研究」、『史学雑誌』53-12 : pp.41-97, 史  
学会 ※『関晃著作集 第五巻』: pp.222-271(1997 吉川弘文館)に再録

天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編(1972)『古代史籍集』(天理図書館善本叢書と  
書之部第一巻), 八木書店

中川ゆかり(2003)「講書と竟宴一日本紀竟宴和歌の一面一」、『羽衣国文』14 : pp.17-47,  
羽衣学園短期大学

西宮一民(1970)『日本上代の文章と表記』, 風間書房

西宮一民(1977)「日本書紀「訓読」の論」、『国語国文』46-6 : pp.1-19, 京都大学文学部  
国語国文学研究室

宮澤俊雅(1987)「解題 附校勘」, 東京大学国語研究室資料叢書第十二巻『倭名類聚抄 天  
文本』: pp.611-640, 汲古書院

ト部兼夏写乾元本日本書紀神代卷上下二巻の閲覧を御許可下さいました天理大学附属天  
理図書館、御高配を賜りました金子和正氏・秋永一枝先生にお礼申し上げます。

一文京学院大学外国語学部一

前号拙稿(『『和名抄』所引『公望私記』の万葉仮名訓について) 正誤表

頁・行	誤	→	正
p.11 1.1	真淵和夫	→	馬淵和夫
p.13 (表6)	同円本	→	道円本
p.21 (表13)	同円本	→	道円本
p.25 1.-8	『日本書紀』	→	『日本紀私記』
p.29 1.-10	現資料	→	原資料
p.32 1.-13	『日本問答』	→	『日本紀問答』